

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：阪上 由美

研究分野	研究内容のキーワード
在宅看護、訪問看護	在宅看護、小児訪問看護、修正版グラウンティッドセオリー、現象学
学位	最終学歴
修士（人間科学）	大阪府立大学大学院人間社会学研究科人間科学専攻博士前期課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		
1. 在宅看護学の授業実践	2013年4月～2015年3月	<p>「在宅看護学概論」では、学生が苦手とする「ケアマネジメント」の理解ができるように4コアを使って演習の工夫を行った。「在宅看護学ケアプラン演習」の冊子を作成し、事例を通して具体的なケアプラン作成のグループワークを行った。そして、グループワークの成果物の共通理解を促進するために、「ケアプラン発表資料」を作成し、在宅看護学実習に生かせるように工夫を行った。</p> <p>「在宅看護学援助論Ⅰ」では、人工呼吸器の業者の協力のもと、「在宅人工呼吸器療法」の実際を実物の機械を使用して体験する機会を設けた。</p> <p>「在宅看護学援助論Ⅱ」では、在宅看護で多い疾患である「脳梗塞」と「ALS」の事例を用いて、学生が主体的により実践に近い内容で看護展開ができるように演習の工夫を行った。実際の在宅看護学実習記録を用いて、前半はグループで思考過程の整理を行い、後半は具体的な看護計画に沿った技術演習を実施した。そして、グループワークの成果物の共通理解を促進するために、看護過程演習の発表を行い、在宅看護学実習に生かせるように工夫を行った。</p>
2. 在宅看護学の授業実践	2010年4月～2013年3月	<p>在宅看護論は既習の科目を統合し、看護援助においては創意・工夫が必要になってくる。そこで、大阪医療看護専門学校の在宅看護論の授業においては、より臨床実践に近い状況を想定した学習ができるよう、演習を強化し内容の工夫をした。</p> <p>「在宅生活支援論」の終末期看護に関しては、在宅ホスピスを経験した患者の絵本や手記などの教材を用いて、より実践に近い体験を通じて、療養者と家族を理解する力を養うことを主眼にした。そして、対象の自己決定過程を支援する看護の重要性を絶えず教授している。</p> <p>「在宅看護実践論」ではPBLを導入し、学生が主体的により実践に近い内容で看護展開ができるように演習の工夫を行った。具体的には、事例を通して退院時、初回訪問時、訪問時の問題発生が行った時など状況設定を行い、その時の看護展開が行えるように8コマを使用し学生が主体的に学習できる機会を設けた。そして、成果物の発表時は実習先の訪問看護師を招待し、実習前から学生との交流の機会を設けた。</p>

2 作成した教科書、教材		
1. 在宅看護学援助論Ⅱ「演習用教材」	2012年4月	<p>「在宅看護学援助論Ⅱ」の演習を効果的に行えるように、「在宅看護学援助論Ⅱ看護過程」の冊子を作成した。内容は、在宅看護過程の事例に沿った記載例の提示、効果的な演習の取り組みについてなどを明記した。また、「看護過程発表資料」を作成し、発表時に学びの共有が有効に行えることが可能になった。</p>
2. 在宅看護学概論「授業用教材」	2012年4月	<p>「在宅看護学概論」では、学生が苦手とする「ケアマネジメント」の理解ができるように「在宅看護学ケアプラン演習」の冊子を作成し、事例を通して効果的なグループワークができるように工夫した。また、「ケアプラン発表資料」を作成し、発表時に学びの共有が有効に行えることが可能になった。</p>

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 医療法人宝持会池田病院の看護研究指導	2014年4月～2015年3月	2つの病棟の看護研究（研究計画から発表まで）の指導・助言を行っている。
2. 国家公務員共済組合連合会枚方公済病院の看護研究指導	2014年4月～2015年5月	2013年度に引き続き、整形外科病棟の退院支援に関する看護研究（研究計画から発表まで）の指導・助言を行っている。
3. 枚方市民大学「在宅高齢者の生活を支えるケアPart3-体験してみよう！在宅介護-食と褥瘡の関係」	2014年12月6日	枚方在住の住民30名に講義と演習を行った。演習内容は、6つのグループに分かれて、介護者に負担の少ない寝たきりの高齢者の「食事介助」と「体位変換」の介護方法を実際に体験していただいた。
4. 国家公務員共済組合連合会枚方公済病院の看護研究指導	2013年4月2014年3月	整形外科病棟の退院支援に関する看護研究（研究計画から発表まで）の指導・助言を行った。
5. 枚方市民大学「在宅高齢者の生活を支えるケアPart3-体験してみよう！在宅介護-食と褥瘡の関係」	2013年11月30日	枚方在住の住民30名に講義と演習を行った。演習内容は、6つのグループに分かれて、介護者に負担の少ない寝たきりの高齢者の「食事介助」と「体位変換」の介護方法を実際に体験していただいた。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
t2-体験してみよう！在宅介護- 6. 認知症予防のための集団プログラム「脳いきいき教室」開催	2006年9月～2006年12月	は、5つのグループに分かれて、介護者に負担の少ない寝たきりの高齢者の「排泄」と「清潔」の介護方法を実際に体験していただいた。 大阪府立大学実施している認知症予防のための集団プログラム「脳いきいき教室」開催の助手を行った。開催の目的は、地域で生活する虚弱な高齢者の認知機能の低下を予防する効果的なプログラム開発のためであり、周辺住民の高齢者30名ほどが参加した。具体的には、1回目は「学習療法」、2回目「計算力を鍛える」、3回目「エピソード記憶を鍛える」、4回目「注意分散力を鍛える」、5回目「計算力を鍛える」をねらいにプログラムを組んで実施した。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 介護支援専門員 2. 看護師		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 大阪府看護教員養成講習会 修了	2009年4月～2009年12月	大阪府看護教員養成講習会は、看護教育に必要な知識・技術・態度を習得し、看護教員として創造的に活動し得る能力を啓発することを目的に、大阪府の受託事業として大阪府看護協会が実施している。その講習会を平成21年4月から12月までの9ヶ月間にわたり受講し、教育の基盤や看護学教育課程や看護学教育方法などを履修した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 「家」の中の看護役割－大正期の派出看護婦と主婦の関係性再考－(修士論文)	単	2008年3月	大阪府立大学大学院人間社会学研究科	看護の確立期である大正時代の「家」のなかにおいて、医師による「専門職支配」－医師を頂点にしたヒエラルキー構造－のもと、派出看護婦と主婦がどのような関係性であったのかを、商業婦人雑誌を分析の素材として、明確にしていく作業を試みた。その結果、近代日本国家のなか、国民化された無償労働の主婦と有償労働の派出看護婦が、「家」のなかで微妙な聞きあいをおこないつつ、「看護役割」をジェンダー化していったことを明らかにした。そして、以上から明確になったことを踏まえ、現代の訪問看護師が「家」のなかで「看護」を行う上で、専門職としていかにあるべきかを模索した。(106頁)
3 学術論文				
1. 在宅看護学領域における統合看護学実習前後の「社会人基礎力」の変化と実践場面との関連	共	2016年3月	摂南大学看護学研究, Vol. 4, No. 1, 27-36, 2016	本研究の目的は、在宅看護学領域における統合看護学実習(以下、統合看護学実習(在宅)とする)前後の「社会人基礎力」の4つの上位概念と13の能力要素の変化と、13の能力要素と実践場面の関連を明らかにすることである。統合看護学実習(在宅)を修了した学生7人の、13の能力要素の自己評価平均点を統合看護学実習(在宅)前後で比較した。「社会人基礎力」全体の平均点は実習後に上昇し、「社会人基礎力」13の能力要素の上位概念である4つの能力の「アクション」、「シンキング」、「チームワーク」、「倫理」の全てが上昇した。これらの下位尺度である13の能力要素では、「規律性」、「ストレスコントロール力」のみが実習後に低下した。また、実習記録から実践場面をカテゴリー化した結果、9場面の実践場面が抽出できた。その実践場面と13の能力要素の関係は、相関分析の結果、3つのグループに分類できた。統合看護学実習(在宅)は学生自ら設定した実習テーマの探究により多岐にわたる実践場면을体験し、「社会人基礎力」を高めた。 共同研究者：山本十三代、阪上由美、田中結華、後閑容子

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 看護学部－薬学部専門職連携教育の取り組みについて	共	2014年3月	摂南大学看護学研究Vol. 2, No. 1, pp57-67	2013年度実施した摂南大学の看護学部－薬学部専門職連携教育の取り組みの実践報告をまとめた。結果、学生は他学部学生と意見交換することの難しさを感じながらも、自己の課題が明確にでき、その課題を乗り越えることがチーム医療を醸成することにつながることを理解できた。また、IPB教育のあり方の課題も見え次年度の方法の検討につながった。 共同研究者：板倉勲子、安原智久、辻塚己、阪上由美、山本裕子、森谷利香、山本智津子、村松十和、奥野智史、木村朋紀、中尾晃幸、河野武幸、後閑容子、荻田喜代一
3. 気管カニューレ内低定量持続吸引「音」の意味の理解－多系統萎縮症在宅療養者の家族と訪問看護師の語りから－	共	2014年12月	日本難病看護学会誌19巻第2号, pp213～219	本研究は、MSA在宅療養者の家族にとっての気管カニューレ内低定量持続吸引「音」の意味と、訪問看護師がいかにその「音」の意味を理解しているかを記述していくことを目的とした。その結果、A氏の妻は、様々な状況と折り合いをつけながら、日々の生活の中で「A氏の日々の状態を見極めるサイン」として、気管カニューレ内低定量持続吸引「音」へ志向するという生活の編みなおしを行っていることが示唆された。また、訪問看護師たちが気管カニューレ内低定量持続吸引「音」の意味を理解するためには、A氏の妻がその「音」へ志向するという生活の編みなおしを行ってきたことを尊重し、共感することの必要性が示唆された。（7頁） 共同研究者：阪上由美、小西かおる 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可
4. 訪問看護ステーションにおける実習受け入れ体制の充実をめざして	共	2000年12月	日本病院会雑誌Vol. 48, No. 3, pp. 109～113	訪問看護ステーションの臨地実習の受け入れ態勢を見直し、実習指導者の配置の強化と実習指導計画書の作成を行った結果、学生の指導体制が充実したことこの報告である。下記の学会にて発表時、優秀演題に選出され日本病院会雑誌に投稿したものである。（5頁） 共同研究者：北村敦子、宮島由美 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. The educational effects of a comprehensive practicum (in home nursing care) ? changes in fundamental competencies for working persons before and after the comprehensive practicum	共	2016年7月	The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing [KOREA]	本研究は、在宅看護学領域における統合実習の教育効果を明らかにすることを目的とした。結果、社会人基礎力は統合実習前後では、実習前の平均3.28(SD0.20)が実習後は3.45(SD0.34)と高く、「アクション」、「シンキング」、「チームワーク」、「倫理」全てにおいて実習後に高い値を示した。特に「シンキング」は実習前2.92(SD0.23)、実習後3.30(SD0.39)と有意な差(p<0.05)を認めた。13の能力要素では、「規律性」「ストレスコントロール力」が実習後に若干低い値を示した。学生自らが統合実習のテーマを設定し、それを達成するために主体的に、自分の中に問をたて探究していくという統合実習の教育効果は、社会人基礎力を上昇させたことが示唆できた。 共同研究者：山本十三代、阪上由美、後閑容子、田中結華
2. A study of practical home nursing care processes toward chronic home-care patients' self-awareness of their latent needs	単	2016年7月	The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing [KOREA]	本研究は、慢性期在宅療養者が潜在的ニーズを自覚するまでの訪問看護師の看護実践のプロセスを明らかにすることを目的とした。結果、24の概念、4サブカテゴリー、4カテゴリーが生成された。訪問看護師は、【生活安定のための病状管理】を行いながら、限られた時間の中で「語り」の時空を創る実践をしていた。そして、【在宅療養者の意向を重視して添う】関わりを行うことで、潜在的ニーズを見いだす糸口を模索していた。同時に、訪問看護師は、在宅療養者の【生きる活力の充填への実践】を行いながら、【今後の見通しを立てる】ことで、在宅療養者の【背中を押す】実践を行っていた。そして、訪問看護実践が、訪問看護師によるパターンリズムになっていないか、絶えず【看護実践について省察】していた。
3. 在宅看護実習時に臨地指導者が実施可能と考える「看護技術」の範囲	共	2015年12月	第35回日本看護科学学会学術集会[広島]	在宅看護実習時に臨地指導者が実施可能と考える「看護技術」を把握し、今後の在宅看護教育の方向性を明らかにすることを目的とした。結果、在宅実習は見学が中心と捉えがちであったが、看護師と一緒にであれば、看護学生も実践が可能と捉えられている項目が多かった。このことをふまえて在宅援助技術修得において、在宅で提供される援助技術項目と学内

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
4. 退院支援における病棟の取り組みと看護師の認識の変化	共	2015年12月	第3回大阪府看護学会[大阪]	<p>演習内容の見直しと教授方法の再検討が示唆された。 共同研究者：石橋文枝、後閑容子、阪上由美</p> <p>退院支援フローチャート（以下フローチャート）を中心とした病棟の取り組みと看護師の認識の変化の要因を明らかにすることを目的とした。結果、フローチャート導入前後に平均値が上昇し、看護師の退院支援に対する認識の変化がみられた。今後は充実したチームカンファレンスの実施と実践的な多職種との連携が課題であることが示唆された。 共同研究者：神田栄美子、米丸恭代、阪上由美、山本十三代</p>
5. 療養者・家族のニーズに応える排痰ケアとは—気管切開した在宅療養者の訪問看護場面から— 〔口頭発表〕	共	2014年3月	第18回在宅ケア学会学術集会[東京]	<p>気管切開をしている療養者とその家族のニーズに応える排痰ケアを、熟練訪問看護師が看護実践でどのように行っているのかを明らかにすることを目的とした。結果、訪問看護師は、気管カニューレからの持続吸引「音」から醸し出す妻の反応とA氏の状況を総合的に判断しながら排痰ケアを実践していた。その実践は、A氏の状態を気管カニューレからの持続吸引「音」で見極めている妻の判断を尊重した行為と言える。一見、訪問看護師は、A氏の気道浄化というニーズに対してだけ排痰ケアを行っている様に見えるが、持続吸引「音」に不安を抱える妻へのニーズに対しても意識化しないで同時に行っており、家族も含めた排痰ケアを実践していた。 共同研究者：阪上由美、後閑容子、石橋文枝</p>
6. 訪問看護ステーションにおける在宅看護実習の受け入れの現状に関する調査 〔示説発表〕	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会[大阪]	<p>在宅看護学実習を受け入れている訪問看護ステーションの設備環境や実習指導体制の現状を明らかにすることを目的とした。結果、実習指導者は、看護課程の展開等の指導や学生の訪問事例の検討、実習記録に対するコメントなど高い志気で学生指導に臨んでいることが明らかになった。しかし、実務との関係で記録を見ることの負担感も訴えており、教育機関として実習記録用紙の検討や指導者との調整が必要であることが示唆できた。 共同研究者：石橋文枝、阪上由美、後閑容子</p>
7. 訪問看護師の専門職的責任意識と「性役割態度」、「伝統的態度」との関連性の検討	共	2011年3月	第15回日本在宅ケア学会学術集会（広島）	<p>訪問看護師における性役割態度や看護師の専門職化に対する伝統的態度のあり方が、訪問看護師の専門職としての責任意識とどのような関係にあるのかを明らかにすることを目的とした。 その結果、対象者の特徴は、訪問看護に興味があつて再就職として訪問看護師を選択し、子育てと職業を両立している集団であるといえた。 そして、准看護師より看護師の方が、性役割態度が平等主義的態度である方が、聖職志向が強い方が、専門職的責任意識が高い傾向にあった。対象の特徴からも言えるように、訪問看護師を選択した看護師は、交代性勤務のない自分のライフスタイルに合わせた働き方を再就職として選択しながらも、訪問看護師として専門職的責任意識をもって働いている集団であることが示唆できた。 共同研究者：阪上由美、河野あゆみ</p>
8. 看護教員の職業アイデンティティに影響を及ぼす要因—看護教員養成講習会受講前後の結果—	共	2011年10月	第42回日本看護学会看護教育学術集会（愛媛）	<p>看護教員養成講習会を受講した前後の看護教員の職業アイデンティティの変化を追跡調査することで、看護教員の職業アイデンティティの影響要因を検討した。 その結果、看護教員養成講習会は、看護教員の職業アイデンティティの発達過程の機会になった。そして、看護教員のモチベーションの向上や継続意思を保つための個人の努力、組織の支援による継続教育を行うことで、教育経験を蓄積すれば、職業アイデンティティは高くなることが示唆できた。 共同研究者：阪上由美、塚本陽子</p>
9. 訪問リハビリテーションにおける看護婦と理学療法士との効果的な連携	共	2000年6月	第50回日本病院学会（秋田）	<p>訪問看護師と理学療法士のリハビリ勉強会を実施し、訪問看護師のリハビリ技術の向上を図ると共に、在宅療養者宅でのリハビリ計画のカンファレンスを実施した。その結果、在宅療養者に効果的なリハビリを行えたことの報告である 共同研究者：中井佳里、宮島由美、大塩由紀</p>
10. 訪問看護ステーションにおける実習受け入れ体制の充実をめざして	共	2000年6月	第50回日本病院学会（秋田）	<p>訪問看護ステーションの臨地実習の受け入れ態勢を見直し、実習指導者の配置の強化と実習指導計画書の作成を行った結果、学生の指導体制が充実したことの報告である。 共同研究者：北村敦子、宮島由美</p>
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 看護学生－薬学生専門職連携教育の取り組み	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会[大阪]	交流集会において、摂南大学のめざす薬に強い看護師像を紹介して、そのために考案中の本学のIPEの目的や実施した科目の成果と課題について報告した。参加者との意見交換を通してIPEの効果的な運営を共有でき、今後のIPEのあり方が検討できた。 共同研究者：板倉勲子、安原智久、辻塚己、阪上由美、山本裕子、森谷利香、山本智津子、村松十和、奥野智史、木村朋紀、中尾晃幸、河野武幸、後閑容子、荻田喜代一
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2016年9月3日2016年9月4日	第15回日本アディクション看護学会 実行協力委員
2. 2016年8月27日	第21回日本難病看護学会学術集会 一般演題示説進行係
3. 2015年4月～	西日本MG T A研究会事務局